

先生は、「私たちがこのように平和な毎日をごせるのは、苦しい脱出ではあったが、あの三八度線に、その当時『鉄条網』や『地雷』が敷設されていたなかったからだ」と仰いました。もしも、あと二年引揚げが遅れていたらと思うとき、世界中の紛争地を見るにつけ、このことは切実に胸に迫ります。

あれから六十年の歳月が流れ、今の時世にもそれなりの苦しみや悲しみがありますが、どうかこれからの人々には、このような体験をしない人生を歩むことができるよう、国の指導者の賢さを心から願っています。

## 十歳の目と足

徳島県 稲井 清

はじめに

かつて、フランキー堺さん主演の「私は貝になりたい」というタイトルの映画がありました。私も六十年間、ひたすら貝になり、二枚貝の蓋を固く固く締め、敗戦前後の話は妻子はもとより孫にも、ましてや友人や知人にも一切語ることなく、あえてその話題に関しては反らし過ごしてききました。その大きな理由は、朝鮮からの引揚げというだけで相堪比びしい差別といじめに遭ったからです。自分自身を守るためには「貝」にならざるを得ませんでした。

この、二枚貝の固い蓋を開けて下さったのは、長姉美津子の友人で現在東京在住の、中村登美枝様の「生きて帰れよ」の自伝書を拝読するチャンスに恵まれ、自伝書の一語一句に大きな感銘を受

けたことと、引揚記録の執筆を熱心に勧誘されて、中村様のお人柄と熱意に打たれたことと、さらに戦争という悲惨な生地獄を書き綴ることにより、「平和の尊さ」「平和の有難さ」を子孫に語り伝えることも親の使命かと考え、私個人のほんの身近な出来事のみを、つたない文章で自分史的に書き綴ってみました。これから書くことは、昭和五十七（一九八二）年五月十八日に死亡した母の残したわずかなメモと、私の命の恩人である次姉のメモを骨子として、その他の資料の一部を参考にして、ほとんど忘れかけていた遠い遠い私の記憶を呼び起こし、頑張ってみました。

### 一 家族の状況

当稲井家の当主稲井操は阿波の徳島土成町の出身です。家業は田舎の百貨店で、日用雑貨衣料、棺桶などを扱っていて、長兄が経営していました。次兄と三男だった父は、年若くしてロシアに渡り、次兄は写真技術を学び、父は歯科技術を修得して、シベリア出兵のときにウラジオストク経由で渡

鮮し、豆満江の河口、北朝鮮の三大良港の一つと言われた雄基に渡り、京城（ソウル）で資格を得して歯科医院を開業しました。その後、父二十八歳のときに一時徳島へ帰り、吉野川を挟む鴨島町千恵島の出身で大農家の唐木家の末娘十八歳の千恵子と結婚、大正十四（一九二五）年八月十日挙式、大正十四年八月二十日渡鮮、京城で一泊し健康状態を再検査したあと、咸鏡北道慶興群雄基邑新町百八十二番地に定住しました。父はロシア語の通訳免許を持っていて、ロシア語の日常会話には不自由なく、自分の書類はすべてロシア語で書かれていました。母は十八歳の若さで渡鮮したのですが、猛勉強のおかげで朝鮮語はもとより中国語までもマスターし、外国人の患者さんの対応は不自由なくしていました。雄基の町の住民はほとんど日本人でした。歯の治療は現金収入だったので、何不自由のない、当時ではかなり裕福な生活ができていました。朝鮮人のお手伝いさんや子守りを雇っていて、私は朝鮮人の子守りの背中で

育ったせいかな、長い間、母親のことを「オンマー」と言い続けていたと兄姉から笑われていました。父の自慢はロシア時代の護身用コルトの拳銃でしたが、毎月近くの派出所のお巡りさんが来て、ピストル一丁と実弾の数を点検していました。一度でよいから両手で触れさせてほしいと懇願しましたが、とうとう見るだけで、そのうちに献納してしまいました。残念！

父はまた子供たちの将来をいろいろと考え、不動産の山林を購入し、あの山はうちの山だ、こっちの山林もうちの山林だと何度も聞かされましたが、これもとうとう一度も登らず終わりでした。残念！

長姉の美津子は、京都の女学校の寄宿舎に入っていました。毎日毎日学徒動員で、一日中機械工場の中で油まみれになって兵器の部品磨きと製品の包装に明け暮れ、ほとんど勉強らしきことは全くさせてもらえぬ、不幸な大変なときだったそうです。

がら、父の帰りを一日千秋の思いで頑張っていました。雄基の憲兵隊からも「次の船便で必ず帰れますよ！」と嬉しい言葉をもらっていましたが、とうとう父は姿を見せてくれませんでした。まさに「父帰らず！」でした。

私は昭和二十年八月八日までは、日本が戦争をしているという実感はほとんどありませんでした。小高い丘の上にある雄基国民学校の校庭から見おろす雄基港の沖合で、機雷処理で「ドーン」という地響きと数十メートルにも上がる水柱を眺める程度で、ときどき飛行機が飛んで来ても高々度のためか、かすかに爆音が聞こえる程度でした。校庭の片隅には奉安殿があり、正面玄関の右側に二宮尊徳の銅像があって、毎朝夕に最敬礼をしていました。このように四年生の夏休み半ばまでは、何一つ不自由なく、姉弟妹と共に極めて順調に成長していました。ただ、体がやや小柄で気弱な泣き虫でしたが、二つ年上の悦子姉が私をいじめめる悪童をよくこらしめ、再三再四追っ払い助けてく

長兄の朝雄は咸鏡北道羅南の羅南中学校二年生で、これも寄宿舎生活でした。

そして、家には雄基国民学校六年生の次姉悦子、同じく四年生だった私、清。まだ就学していない次弟の翠（五歳）と、生まれたばかりの末妹の三重子、それに両親と計六人が生活していました。

昭和二十年の春、父は土成町の本家の跡取り息子である滋郎さんがビルマで戦死し、その村葬に参列するため単身で帰郷しました。村葬も終わり、家族が待ち焦れる雄基に戻るべく船便を探していましたが、とき既に遅く日一日と戦況が悪化するときに船便はなく、たまにあつても軍関係者優先で、一般民間人は次便へ次便へと回され、ありとあらゆるコネを頼って東奔西走していたが、渡鮮は不可となった。ここで完全に雄基にいる私たちと音信不通となり、再会できたのは一年五カ月後のことでした。

父の不在の間、母は愛国婦人会会員、そして国防婦人会会員として、銃後の守りに懸命に努めな

れていました。悦子姉は頭もよく、力も強く足も速く勉強もよく教えてくれて、本当に頼りがいのある人でした。

戦局が厳しくなってくると、日本本土から中国に向かう兵隊さんが多くなり、雄基でも数人ずつ各家庭に分散宿泊するようになりました。母と悦子姉が、その兵隊さんに千人針を贈ったり、手紙を書いて慰問袋に入れたりしているのをよく見ていました。何も分からないイガグリ頭の私は、早く大きくなって兵隊さんになるのだと叫んでいました。そのころは、兵隊さんが大きく、強く、たくましく、格好良く見えていたのです。

## 二 ソ連軍の侵攻

昭和二十年八月八日深夜から九日への日付が変わったころ、遠雷のような音が聞こえてきた。母の大声でたたき起こされたが、頭がぼーっとして何が無だか分からなかった。母は異常に興奮していたようでした。十二歳から零歳の四人の子供を守らねばと思うと、気が立ってヒステリック

になるのも当然のことです。

空が白々すると同時に、赤い大きな星のマークをつけたソ連軍の飛行機が、頭をかすめんばかりに低く飛んできました。パイロットの顔が見えるような超低空から、爆撃を何回も繰り返し返しました。建物への爆撃ばかりでなく、火の下を逃げまどう人々を、女、子供、老人の区別なく銃撃を繰り返ししていました。純白のチマチヨゴリを着ていた朝鮮婦人を、バリバリと機銃掃射をしていた光景は、今なお眼底に焼きついています。これほどまでも破壊、殺戮を繰り返さなくても、と思うほど狂ったようでした。

近所の人たちは、襲撃の合い間を縫って先を争って学校の裏のかささぎ山や、学校の坂の下にある軍用の防空壕に避難していました。私たちも取る物も取りあえず防空頭巾をしっかりとかぶり、避難袋を持って防空壕へ走りしました。私は零歳の妹を背負っていました。防空壕はぎつしり詰まっています、入口の戸が締まらぬほどこでした。身動

いません。單身帰郷したままの父、今ここでこの場で、絶対必要な父親が不在！ 十二歳の姉を頭に四人の子を連れた最悪の条件下、母は私たちが想像する以上に、心細く心配だったこととされています。当然のように言葉、行動も荒く男性的になったが、これはやむを得なかったと思います。急変した母が怖く思われました。

### 三 茂山に向かったの大移動

大移動のスタート時点では先頭グループにいたはずでしたが、毎日毎夜、朝露、夜露を踏んでどんどんどんどん進む逃避行、乳飲み児の妹を背負う私、もともと小柄で体力がなく、その上空腹のため休み休みの逃避行。道端に座り込んだり、寝ころんだり、そして疲れ切ってそのまま寝込んでしまったり、この道は軍隊が通る道だから畑の中に入れ、と軍人さんから命令されたり叱られたり、仕方なく移動して畑の中でひと休みしていると、今度は大雨に打たれず濡れになってしまい、私と弟は泣きじやくりながらただ歩くのみ。空腹の

き一つできず声も出せず、怖い顔をした大人たちは何も教えてくれず、何が何だか分からないまままんじりともせず一夜を明かしました。

翌八月十日の未明、凄惨な危機感を憶えながら大移動が開始されました。約十年間住み慣れた家であと、私は両手に小さな風呂敷包みを持ち、背中には妹を背負い、母と姉は二、三日分の食糧と水筒と着替え少々を、五歳の弟は毛布一枚ぐらいのほとんど手ぶら状態。長期間にわたる避難生活が待ちかまえていることなんて、だれも予想した者はなかったのです。上はシャツ、下はズボンの簡単な夏服姿の人々がほとんどでした。大事な物を忘れたことを思い出して、目の前の家に取りに行こうとしても、ひっきりなしの爆撃で町中が火の海と化して、全く近づくことができない有様でした。大きな建物は「ボン、ボン」と異様な音をたてて焼け落ちていました。時間の経過と共に危機が迫り、殺気だった母の命令で、みんなについて雄基から追われるようにして鉄柱洞に向か

ため、五人共ほとんど無口でとぼとぼと歩いていました。途中で幼い子供を捨てる人も、手のかかる年寄りを、その場に置き去りにする人もいました。目に涙をいっぱいためて声も出さず、ただ無言で座ってる老人、まさに生き地獄そのものでした。私たち女、子供連れは、大集団から完全に脱落してしまい、真の落ち零れ組になり単独行動をせざるを得なくなりました。大集団の移動した跡を手探りのように探しながら歩き、ある夜にやっとなかりのともる一軒の家にとどり着きました。そこは、自爆寸前の駐在所でした。遠くで明かりを見た母は、「あそこで泊めてもらえるようお願いしてみようから、もう少し頑張れ」と言っていたが、ひと休みすることもならず追い払われてしまいました。

これ以外にも、いろいろと恐ろしい目にたびたび遭いました。地元の朝鮮人に追いかけられたり、お金や持ち物を強奪されたりで、それはそれは言葉では言い表すことのできないようなことばかり

でした。大集団が通過した道の目印がいたずらされて、全然違った方向に歩いたこともありましたが、そんなときも母の判断で「この道を行こう！ いやあつちの道かな？ やっぱり違うわ、元の道へ引き返そう」など迷いに迷いながらも、茂山を目標にして歩きました。あとで聞かされたことですが、大集団は雄基を出発して会寧に向かい、茂山に着するまで九日間要したとのことですが、私たち女、子供の落ち零れ組は、約二週間余りを要していました。雄基を出発するときに携行した食糧や水は、もうとつくに食べつくして、激しい空腹と真夏の暑さで倒れる寸前の状態になっていました。疲れ切った足を引きずりながら、道端の畑から唐黍や枝豆や野菜など盗んで五人で分け合つて食べ、川を見付けては渴ききつた喉をうるおして、歩き続けていました。命からがらやつとどり着いた茂山は、避難民の人々で大混雑でした。ひと休みする間もなく、「ソ連軍が茂山に向かって侵攻しているので、すぐに移動して下さい！」

と言って大声で叫んでいるのですが、もうこれ以上は歩ける状態ではありませんでした。

しかし、このままここにいることもできないので、大集団に合流して延社に向かってぞろぞろと歩き出しました。やつとの思いでたどり着いた延社で、大変な事件が発生しました。

雄基避難民の大集団が、二つに分団されることになったのです。日本が負けたことをどうしても信じられない雄基組と、雄基へ戻る望みを断ち切り南へ向かうという南下組とに、意見が分かれてしまったのです。各人は生と死を運命に任せ、己が信ずる道を選んで歩いて行くことになりました。まさに自己責任の行動です。

あとで大人の人の話で分かったことですが、一万人以上の日本人避難民が延社にいては、現地の朝鮮の人たちの食糧にも悪影響が出るということで、日本人全員が追い出されたのだということでした。

#### 四 姉は命の恩人

母は、本来我が家の大黒柱であるべき父が不在である現状において、羅南中学二年生の長男と、ひよつとしたら逃避行の途中で再会できるのではないかとも考えたが、いや、一人で雄基に帰り私

セサリーなど、めぼしい物をすべて強奪されてしまいました。私たちは全くの無一物になったのです。哀れな姿の日本人避難民からの大略奪です。

たちを待っていてくれるかとも思い、さらには南下組に入っても、毎日毎日大集団から遅れっぱなしになるだろうという道中不安、そして危険も多いと考え直し、友人、知人が多い雄基に戻る決心をして、雄基組に入ることにした。母と姉はその決心をするまでに、相当に悩み苦しんだそうです。南下組が意外と多かつたことも、悩ませた原因の一つでした。日本での再会を祈りながら、南下組は私たち北上組と別れて出発しました。

雄基へ戻る北上組は、長い間ここ延社で待機させられました。やつと山林鉄道の貨車に押し込められて、茂山に向かいました。

茂山に到着し下車させられると、すぐに待ち構えていたソ連兵と朝鮮の暴民に襲われ、母は大事に大事にして隠し持っていた指輪や腕時計やアク

返るがごときもので、こうまでもひどい仕打ちを受けなければならぬかと思ひ、全く無防備で何の抵抗もできない赤子の手を、ねじり上げるようにしながら略奪していくソ連兵と暴民には、子供ながらも悔しさが込み上げてきたが、どうすることもできませんでした。母は悔しさをこらえながら、四人の子供を何としてでも助けねばならぬという一心で、黙って持ち物をすべて差し出してしまいました。

すべてを失った母は、もうこれ以上避難するのは無理だ。ここが限界だと考えて、妹を背負った私の片手と弟の片手をしっかり固く握りしめて、茂山の湖に入水し無理心中を図りました。これ以降も、場所は違いますが何回も無理心中の寸前まで追い詰められたことがありました。

そのように切羽詰まった中においても、十二歳の姉は氣丈夫で、独立心も強く、「自分一人でも生きて行く！ どうしても内地にいる父や姉に逢いたい。だからここで親子無理心中は絶対にしない！」と言つて、そのつど単独行動をしていました。

あるとき、姉は朝鮮人に直接甘い言葉をかけられて、その言葉を信用したばかりに大事なリュックサックなど、それに母から預かっていた重要書類など、すべてを騙されて奪われてしまいました。そんなことがあってから、朝鮮人が今まで以上に大嫌いになった、と姉が言っていました。私や弟妹は、母の言うがまま、なすがままでした。

さてその無理心中ですが、死の直前までに追い込まれたのですが、母はあまりの水の冷たさに、「ハッ！」と正気を取り戻し、別れた姉のことが急に心配になり、無理心中をとどまったのです。現在、古希を迎えることができて生がある私は、悦子姉のお陰と感謝している今日です。

大きなトラックが、日本人から略奪した荷物を山のように積んで追い越して行き、さらにそのあとのトラックの荷台の上には数人のソ連兵がいて、ニコニコ笑いながら疲労困憊しきつている集団の行列に横づけして、「若い女だけこのトラックに乗りなさい！」と声を掛けながら数人の女性の手を掴んで強引に乗せ、猛スピードを出して走り去りました。数時間後には、先ほどトラックに乗せられた人たちが泣き崩れて道端に座り込んでいましたが、服はボロボロに引き裂かれていて、子供心にはどうしたの！ 何があつたの！ と不思議な思いをしました。

雄基に向かって毎日の炎天下を歩いていた私は、ある日、直射日光と空腹のため、突然に意識を失つてその場に倒れてしまいました。母は背中のリュックサックを下ろして、道路端にあつた農家に走り込み「子供が死にかけているので助けてほしい！」と頼み込んだが、母の朝鮮語に気迫と熱意がみなぎっていたので、農家の人も同情して一室

茂山から清津に行ったが、その清津で日本の敗戦を伝えられ、朝鮮が独立したとこのことを知らされて驚愕しました。

そこで、成人男子が次々とソ連兵に連れ去られて行きました。どこに連れられて行ったのでしょうか？ 子供には知ることができませんでした。成人男子がいなくなったあと、老人と年端もない子供、それに女子のみの数百人の避難民集団が残り、雄基に向かってぞろぞろと歩く長蛇の列が続いていました。

移動途中で疲労と空腹のためにばたばたと倒れ死人と化し、その遺体を素手や棒切れで穴を掘り埋葬し、道端に草花がある所では供え、そつと両手を合わせるだけでした。避難行動中に、つい最近まであんなに威張っていた兵士や憲兵や警察官たちが、首を下げて情けない哀れな格好でソ連兵の小銃でこずき回され、怯えながら「捕虜」として連行されて行くのにもよく出会いました。

我々避難民集団に対しても、後方からソ連軍の

を開放して私を寝かせ、この地方独特の薬だと言つて壁土をコップ一杯飲ませてくれたのがよく効き、翌朝には嘘のように熱が下がり一応元気を取り戻し、集団に合流すべく歩き続けました。金品を全部奪われたときには、朝鮮人すべてが非人間的で、憎きやつと思つていましたが、日射病で倒れ死にかけていた私を助けて頂くと、朝鮮人に対する考え方、見方が大幅に変わってきました。

集団から落ち零れ見捨てられて、止むなく野宿したこともありました。真つ黒な夜に川原に行つて、手さぐりで寝場所を探していたとき、ちようど小石の少ない砂場を見つけ、川水で洗顔し渴ききつた喉を潤し、久しぶりに体も拭いて手足を伸ばしてぐつすと寝たが、夜明けに川を見ると川底が真つ黒になつていて、一瞬体が硬直し背筋がぞつとしました。鉞山からか、または工場からの排水がたれ流されていて、川底に水銀が沈殿していたのです。危うく水俣病にかかり、命を落とすところでした。またあるときには、きれいな水が

さらさらと音をたてて流れていたのに、翌朝には完全に干上がっていたことも経験しました。朝顔も洗えず、喉を潤すことも叶いませんでした。もちろん狸も狐もいませんでした。

#### 五 雄基にたどり着く

昭和二十年九月九日ちようど一カ月ぶりに、生まれ故郷の雄基に命からがら戻った。着の身着のまま一カ月間の避難、逃避行で身も心もボロボロになり、疲労困憊はその頂点に達していました。私たち親子を迎えてくれたのは、見渡す限り茫茫とした焼け野原でした。ぼつぼつと焼け跡に残った家からは、すべての物が略奪され、見るも無惨な姿がむき出しになっていました。私たちの家は、奇跡が起きたのか！あの大空襲や火災をまぬがれ、家がそこに在って本当に我が目を疑い信じられませんでした。家族全員大喜びで飛んで行き、我が家の出入り口の戸を姉がそつと開けると、そこには見知らぬ朝鮮人が住んでいて、姉の服を着た女の子が、不思議そうな顔をして無言で立って

いたと、悔し涙を流しながら私に話をしてくれました。気丈な姉の泣き顔を初めて見ました。

家の裏には小さな防空壕があり、その中には貴重品や非常食など隠すようにして入れていたのですが、何一つありませんでした。私と弟は、何も分かんずただ母と姉にくつつき虫でした。母と姉は両手を握りしめて悔し涙を流し、全身がぶるぶると震えていました。その場を無言でそそくさと立ち去るのが精いっぱい抵抗でした。一カ月間の苦しい苦しい逃避行の間にも、一瞬たりとも忘れたことのない雄基の夢！雄基に帰れば、ひよつとしたら奇跡が起こり家が在り、羅南中学生の長男が無事に帰宅していて再会し、そして最終便で渡鮮した父とも再会！との夢は完全に打ちくだかれ、母はショックが大きく、生気を失い夢遊病者のように変わってしまいました。姉は母の体を強く支えながら歩き、私たちの集団は旧都旅館で一夜を明かし、翌日は街はずれに焼け残った白鶴洞の砲廠に押し込まれました。

その日からは、コンクリートの上に筵一枚を敷き、百メートル以上は動くなど言われる監禁の身になりました。何一つ食べる物を与えられず、とにかくお腹が空き、大人も子供も地べたを撫で回し、小さな草などを口に入れていました。口に入るものは何でも口に入れました。

少し落ち着いたころ、元警防団長の吉田という偉い小父さんが、避難民団を組織して、ロシア語ができる辻又次さんが通訳となり、今後外部との交渉のお世話をして下さいになりました。ここに父がいてくれたら、どんなにか心強く頼もしかったことかと思うと、村葬の意味が全然理解できなかつたので、父と村葬が恨めしく思いました。

雄基の冬は大変寒く、十月には雪が降り出し、十二月ごろには氷点下十度〜二十度ぐらいに冷え込んできます。疲れ切った老人、子供たちは、食糧不足のため「栄養失調」という病にかかり衰弱し、骨と皮の人形と化し、朝目が覚めると隣で寝ていた町の小父さんや小母さんが、静かに凍死し

ていました。毎日次から次へと、ほとんど声もなく冷たい体になっていく、周りの人々もただ無言で最期を合掌し見送るばかりでした。大声で泣き叫ぶ、気が狂った若いお母さんも見ました。まさに地獄でした。私の背中に、一カ月余りも背負われ続けたかわいい妹三重子も、生後一年二カ月で栄養失調で亡くなりました。八月八日まで丸々と太った妹でしたが、母の母乳が全然出なくなつてから、雑食のお粥の重湯だけの授乳では生きられるはずもなく、母は「三重子が皆の身代わりになつてくれたんだよ！」と哀れみ悔やんでいました。丸々太り、五体満足で元気だった三重子は、一カ月余りの逃避行のため全身が痩せ細り、手をふれるとポキッと折れそうな手足、色白で鼻筋の通つた美形の妹でしたので、悔やまれてなりません。少ない遺髪と小さな爪だけが唯一の遺品です。小さな箱を拾って、小さな布切れで全身を包み、箱に収め凍った土を家族全員で穴を掘り交替で両手を合わせながら埋葬し、遠い遠い異国に一人残

してきました。私は一日中泣いていました。国交正常化された暁には、墓参団に参加、いや個人でもお墓参りをしたいと思いつながら六十年、当家の戦争犠牲者第一号です。明日は我が身か、全く先が見えぬ毎日。こんな不安な日が二十日間も続きました。たった一人の妹を失つてからは、私たち全員気力を失い、ただ息をしているだけの空虚なときを費やしていました。

#### 六 極限の避難民生活

その後、満鉄の社宅へ移動させられました。六畳ぐらいの部屋に十人ぐらい押し込められました。六畳、少しは足腰を伸ばすことができるので、全員が喜んだのです。しかし、毎夜のごとくにソ連兵が大きな声で「マダムダワイ！」「マダムダワイ！」と叫びながら女性を襲う日々でした。女の人の「助けて！」という悲鳴が聞こえるのですが、私たちが子供ではどうすることもできず、ただじつと耳を両手で抑えるだけでした。収容所でのトイレは、建物から少し離れた外に穴が掘られ、四方を薙で

囲むだけの簡素な物でした。夜、女性が用を足しに行くとき、必ず見張りをしている露助に襲われていたためつけられ、ただ泣き寝入りさせられるだけでした。毎夜毎夜続くこの地獄、女性を露助の魔の手から守るため考え抜いた一策は、十三歳以上の女性は黒髪をバンスリ切り落とし頭を丸め、男性の姿をして地下室へ入って、座ったまま夜を過ごすことでした。

ある夜のことです。姉は十二歳でしたので、私たちと一緒に広間の真ん中あたりの真つ暗な中で、毛布を頭からかぶり寝ていましたら、その夜も露助が来て、いつもと同じように大声で「マダムダワイ！」と何回も言いながら毛布をかぶった私たちの間をまたぎ、一人ひとりの頭をさわりながらうろろろしていました。急に姉と私の間で足が止まり、にわかに姉の上に露助が覆いかぶさってきました。私は、息を殺して身を固くして震えていました。そこへ、地下室で息を潜めて隠れていたはずの母が飛び出して来て、大男の露助を突き飛

ばし払いのけて、姉の手を強引に引つ張り、瞬間的に身を隠しました。まさに危機一髪でした。自分の身の危険もかえり見ず、我が子を助けるために全身全霊で打ち込んだ一突き。まさに神業としても忘れそうになった一瞬でした。母の超強烈な一撃を不意打ちされた露助は、大声で怒鳴り散らしながら早々に逃げ帰りました。怖かった！ 本当に怖かった。翌日からは姉も十二歳でしたが丸坊主になり、母と一緒に真つ暗な地下室で座って寝る日を過ごしました。私は、弟と二人で手をつないで寝ることにしました。

この事件後に、露助の家屋侵入防止のために「婦女子守り対策」の一つとして考え出されたのは、焼け跡に落ちていた一斗缶を拾い集め、露助が家屋へ侵入したときは、老人男子と私たち子供が棒切れや小石で一斗缶を「ガンガンガン」と一斉に連打し、騒音で撃退する方法を考案し、毎夜実施して大きな効果がありました。私も一生懸命

に缶をたたきました。露助は大変驚き、一目散に逃げ帰って行きました。このときは、本当に面白く愉快でした。そしてまた十一月ごろから、食糧不足と不衛生のため虱が大量に異常発生し、痩せ細ってしまった姉は「発疹チフス」に罹患し高熱にうなされ、死線をさまようようになりました。

私はどうすることもできずにただウロウロするばかりでしたが、母は三女の三重子を亡くし、その上に次女の悦子までも亡くしてたまるものかと、必死で看病をしていました。ときどき訪れるソ連の軍医に、母は姉の病状を手まね足まねで懸命に訴え、その熱意がやつと通じて、注射を一本してくれました。この一本の注射のお陰と、このとき母はなけなしのお金で朝鮮人から毛布一枚を百五十円で購入し暖を取っていたので、姉の一命は何とか取りとめられました。姉が助かり本当に嬉しかったです。このときだけはソ連の軍医が神様仏様に見えました。

厳寒の冬の間、少しでも元気な老若男女は、埠

頭で焼け残った大豆や高粱を拾い集め、私たち子供は、石炭貨車からこぼれ落ちた石炭やコークスの屑を拾い集めて、食糧と暖を取ることが日々の暮らでした。食料不足で体力がない私は、赤飯色をした高粱粥が、炊いても炊いてもお腹に入ると「ゴロゴロ、ゴロゴロ」下は「ピーピー、ピーピー」と大変でした。

昭和二十一年二月ごろになり、ソ連軍は初めて外出労働を許してくれました。母は恥も外聞もかなくなり捨てて、現地の農家の手伝いや町の人の家へ家事手伝い、あるいは人夫仕事という重労働など、自分でできることはなんでもしたそうです。

敗戦直前までは、現地人を女中やお手伝いさんとして使っていた母が、天と地が逆さまの毎日、私が想像する以上につらかったことだろうと思います。歯を食いしぼり、子供のために一生懸命休まなく一日中働いて、たったの二十円。この二十円で、私たち三人の子供の露命ろめいをつないでくれました。病後の姉は、知り合いの洋品店の若夫婦が息

そんなある日、大事故が起きました。いつものとおりに、夕方一斗缶に枯木や木片を入れ火をつけて母の帰りを暖まりながら待っていたとき、よそ見をしていたために気が付くのが遅れ、左足のズボンの裾に火が燃え移り、あっという間に左足全部が炎に包まれたのです。泣き叫び、転がりながら手でたたき、両手で揉み消してくすぶりを止めましたが、左足膝内側に大火傷を負い、ヒリヒリ痛く大きな水ぶくれができあがったころ、母が帰って来ました。左足全体が熱っぽく痛く、その上たった一本しかない長ズボンを燃やしてしまったことで、大声で叱られると身を縮めています。母は荷物だけをその場に置いて、無言で今帰ってきた道をすぐに引き返し、町の方に行ってしまいました。しばらくして小さな荷物を持って戻って来ました。母の姿を見てほっと安心しました。荷物の中身は、生卵一個と黒い灰でした。それからも無言で食器の中に卵を割り、その中に黒い灰を入れてよく混ぜ粘りをつくり、黒くヌルヌルし

子の子守役として姉を預かるとの話になり、寒く冷たい避難所から出る姉が大変羨ましかったが、離れることはそれ以上に寂しく思いました。全然言葉も分からず文化も異なる朝鮮人の家で寝泊まりすることは、大変心細く不安で怖かったと思います。姉の仕事は、若夫婦の間に生まれた「忠誠チュンナム」という名前の丸々太った一歳にならない男の子を、姉の腰あたりに小さな布団を巻きつけて（日本のおんぶ）、その上に子供をのせ散歩に行くことでした。散歩コースは姉が六年間通った国民学校のあたりまでで、毎日子守りで出かけていたようです。もう一年以上も学校のノートも見ることがなく、ただ日本に帰る日だけを待つために子守りをしたそうです。丸々太った「忠誠」君では、病後の姉には相当重くきつかったことと思います。姉は、母に必ず絶対に迎えに来てくれると固く約束をしていました。姉が子守りに行ったあとの私と弟は、毎日留守番役。夕方になると、母の帰りを今か今かと外で焚火をしながらか待ちこがれる毎日でした。

た冷たいペーパースト状のものを火傷部分に塗りつけて自分の服の裾を破り包帯にして左足に巻きつけてくれました。約三週間ぐらい、毎日帰宅時に生卵一個と黒い灰を買ってきて、傷の手当をしてくれました。一日中腰が折れるほど働いて日当二十円のと、あの時代の卵は超貴重品、相当高かったはず。高価な卵も一回も口には入らず、すべて左足が消化してしまいました。六十年経過した今日でも火傷跡は残り、ここだけ局部的に卵で光り輝いています。私の不注意で、母にはいらぬ苦勞をかけてしまいました。「二度と同じ失敗はしないように今後は注意なさい」と、ひと言のみでした。左足の大火傷が完治するころ、中古の長ズボンを買ってくれました。本当に嬉しかったです。

## 七 雄基脱出

母の話によると、吉田さんや村上さんやその他の方々が、命がけでいろいろと働きかけをして脱出準備をしているとのことでした。私には詳しい

ことは全然分かりませんが、母の仕事帰りの時間が急に遅くなるようになりました。そして顔を合わせるたびに、「お金がいる、お金がいる」と口ぐせのように言っていました。「大人一人八百円」、「小人一人四百円」をどうしても人数だけ集めなければ、ここから出られないのだと、人が変わったように働いて働いて働き抜き、脱出用ヤミ船賃を、一円の借金もせず四人分二千円の大金を団長さんに手渡ししていました。これが、最初で最後の脱出のチャンスとのことでした。もうひと冬極寒の雄基で冬を過ごすことは絶対不可、全員死を覚悟せねばならぬところまで追い詰められていました。

昭和二十一年十月十七日深夜、今夜脱出決行と、母が大急ぎで姉を迎えに行きました。このときの嬉しさは一生忘れられないと、姉は言っていました。洋品店主からは「今、この子が日本に帰っても大変だから、この娘は当家で学校にやり、嫁にも行かすから」と強く引き止められましたが、母

初めのうちは何もかもが珍しかったので楽しかったのですが、だんだん体も疲れて海の生活に飽きてきました。そんなとき、帆船の前後左右の海面を自由に泳ぐイルカの群れに気持ち相がいやされました。楽しそうに自由に泳ぐイルカを、本当に羨ましく思いました。

脱出して四日目ぐらいから、海上の波風が急に荒くなりました。空は鉛色の雲が低く、大暴風雨の真っ只中に舟は飲み込まれ、まさに木の葉のごとくに大波にもて遊ばれ、帆船の命ともいわれる帆が、風と雨と海水のしぶきですたすたに引き裂かれてしまいました。前進も後進も不可。ただじつと船底で暴風雨が通り過ぎるのを待つのみでした。高齢の方は、両手を合わせ読経をあげていました。数時間の暴風雨からやっと開放されましたが、ただ波に舟をまかせて漂うばかりの数時間で、そのうちに幸いにも島に流れ着き、帆を修理している所を現地の人に見つかり大変でしたが、いろいろと交渉してまた沖へ出ました。長い不馴

も姉も全く聞く耳を持たず、脱兎のごとく逃げ帰って来ました。私も弟も、母と姉が戻って来るまでは心配で心配でたまりませんでした。四人がそろったときは本当に嬉しく思いました。七日分の高粱団子と、一升瓶に入れた水三本以外の荷物はほとんど無く、全員集合し無言で物音一つ立てず足音をしのばせ、そろそろと約百余人の大集団が、雄基港のはずれの竜水湖に向かって大脱走！湖口から帆船三隻に分乗して静かに出航して、深夜の真っ暗な海へ。そこから南に向かって何事もなく無事出航しました。

船上では母が二十年の在鮮時代を振り返っているのか、父と二人で築いた多くの財産、この寒い異国の地に一人残してきた三重子のことを思い出しているのか、船底に降りてくるまで少し時間がかかりました。一人で涙していたのでしょうか。乗船した日はぐつすと寝ましたが、夜が明けても南らしい方向へ向かってただ海上を走るのみでした。

れな船中生活、船酔いなどで病気になって三十八度線を越える直前で亡くなる人もました。小さな布で死体を包み板に乗せ、船べりから海上へ「ドボン！」。私たちは両手を合わせるだけでした。一週間の予定で乗り込んだ船も、もうとつくに食べ物も飲み水もなく、喉が渴き割れた唇から血が流れるままに一升瓶を舐めまわす有様。この青黒い海水が飲めたら！ ああ水、水が飲みたい！ 何日も何日も飲まず食わず。船上では何かいろいろあった様子でしたが、見に行ったり聞く気力もなく、ただ静かに船底で横たわっていました。そんなとき、よく分かりませんが、男の人の怒声と共に、陸が近いのか岸の方から「ヒューン、ヒューン」と銃弾が飛んできました。大人たちが大きな声で帆を揺さぶったり舵を動かしたり、風が無くなったので船上にいた人は全員一生懸命、櫓を漕いだそうです。舟は岸を離れ再び沖へ出ることでできて、岸からの銃撃も止まりました。「助かった」「助かった」という大喜びの大声が、耳に入

りました。一刻も早く三十八度線を越えてくれと、毎日祈りました。

竜水口を無事脱出し、一週間の予定のところを二週間余りの十五日間を漂流して、やっとの思いで三十八度線を無事越えて、少し南の注文津に無事入港できました。

#### 八 注文津から日本へ

昭和二十一年十一月二日のことでした。ただただ全員感激の涙、涙でした。このときの表現は筆舌に尽くせません。「よく生きてこられたもの」と、十五日ぶりに陸に上り大地の堅さに嬉しくなり、思わずジャンプしてしまいました。初めて見たUSAの兵隊。赤子同然の避難民から金品を略奪したり、婦女暴行を繰り返した最悪な露助と比べると、とてもスマートで優しい笑顔でした。そこで温かいスープを飲ませてくれました。とてもおいしかったです。そして通訳の人から「僕たちアメリカ兵が皆を守っているから、安心して休んで下さい」との嬉しい言葉がありました。約一年余り

十一年十一月二十二日でした。

#### 九 生活再建

博多港で一年余りの間、生死を共にした友人知人と固い握手をし、名残りを惜しみながら各人故郷に向かって散って行きました。私たちも、父母の故郷に向かって汽車やバスや渡し舟を乗り継ぎ母の里へ、そして父の里へ、やっとの思いでたどり着きました。

羅南中学二年生の兄は、雄基へ単身で戻ることには危険なために、学校から許されず、寄宿舎の先輩に連れられて徒歩で南下。苦労に苦労を重ね、やっとな命からがら三十八度線を突破し、そのあとはたった一人で父の里へ帰って来たそうです。京都の女学校にいた長姉は、伯父が東京で写真館を開業していましたので、そちらの店の手伝いをしていました。私たちの帰国を知りすぐに東京から帰郷して、家族一同元気で再会。手を取り合い、肩を抱き合って喜び合いました。

無一文で乞食同然の姿で帰国した私たち母子は、

の地獄の連続だったので、余計にアメリカ兵が仏様に見えました。その後全員、頭から足先までD Tという白色粉末を散布され、メリケン粉でまぶされた真白の人形のオンパレードになりました。しばらくしてから大きな風呂に入りました。湯船の中は芋の子を洗うようで、人、人、人の大混浴でした。白い粉を洗い流したあとは、ダブダブの中古服を着せられました。母も姉も、また丸坊主にされて、少し恥ずかしそうにいました。注文津で約一週間ぐらい生活していると、日本から大きな引揚船が迎えに来てくれました。やっ和日本に帰れます。皆の顔に、以前には見られなかった安堵感が表れて、大きな船の中ではアカペラで懐かしい歌を歌って喜び合い、名残りを惜しんでいました。博多港へ入港し、即日上陸できると思い喜んだのですが、全員身体検査のため約一週間ぐらい海上で足止めになり、一日一日が長く退屈でした。その後全員検査合格！ やっ日本上陸の第一歩を踏みめました。とき、まさに昭和二

大勢の親戚、友人、知人に助けられお世話になり、各人それぞれの道に進み、私は四十年間フェルト総合メーカー「株式会社フジコー」に勤務。染色技術の研究と開発を担当しました。定年退職後は、土と炎の焼き物の魅力に取りつかれ、手作り作品に一喜一憂し、また健康管理のためスポーツクラブに通い各種トレーニングに汗を流し、友人知人と会話、旅行を楽しみ、長男、長女も結婚独立し、私たちに五人の元気な孫を与えてくれ、今私は人生最高の幸せな時間を皆様から頂いています。

戦後六十年節目の年、古希を迎える年まで生かさせて下さった亡両親亡妹、そして兄と二人の姉、弟と私の周りの多くの方々に、お礼と感謝の念を捧げます。

全世界、全人類が平和を愛して生きることを祈念しながらペンを置きます。